

コロナ禍の教訓と金(ゴールド)

～いつ何時、勃発するか分からない有事に備えた分散投資～

ニューヨーク金先物(以下、金先物)は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴ない、今年8月に1トロイオンス=2,069米ドルと、史上最高値を記録したものの、その後は冴えない動きとなっています。以下では、金が選好され易い主な局面(下の表・グラフの①～④)の観点から、過去を振り返った上で、今後を展望します。

2000年以降を振り返ると、11年8月にかけては、08年9月のリーマン・ショックに象徴される世界金融危機(①)の発生と、それに伴う米長期金利の低下・米ドルの下落(②、④)などを背景に、金先物が大きく上昇しました。ところが、米長期金利や米ドルが横ばいの推移になると、金先物は下落し始め、さらに米ドルが上昇したことなどから、15年12月にかけて調整しました。その後、米長期金利が18年に天井を打った前後から回復ペースが上がった金先物は、19年以降の米長期金利の低下(②)や20年のコロナ禍(①)などを背景に急伸し、8月に史上最高値をつけました。しかし、コロナ・ワクチンの実用化期待が高まると、調整に転じました。

ワクチンの普及までにはまだ時間を要する見通しとは言え、実用化が着実に近づいており、感染拡大の収束が視野に入りつつあることは否めません。ただし、米FRB(連邦準備制度理事会)が23年末までゼロ金利政策を継続するとの見解を示しているように、米国を中心に低金利環境は今後も続く見通しです。しかも、欧米などでは、足元での感染再拡大に伴ない、金融緩和の更なる強化が見込まれています。その一方、来年、ワクチンの普及に伴って経済活動の正常化が進展すれば、景気回復期待や物価上昇観測につながり、③が投資家の頭をよぎることも考えられます。また、15年頃から堅調だった米ドルが下振れの様相を呈していることも注目されます。米大統領選挙という不透明イベントを通過し、感染拡大の収束が視野に入り始めたことなどを受け、投資家のリスク選好度が今後も高まるとすれば、米ドル安(④)圧力が続くと思込まれます。

コロナ禍で歴史的な高値をつけた後だけに、金先物の調整がさらに続く可能性は否定できません。しかし、世界金融危機やコロナ禍によって金融市場が繰り返し大きく揺さぶられたことにより、株式や債券の値動きとの相関性の低さや、米ドルとの逆相関といった、金の価格特性が幅広い投資家層に浸透したと考えられます。加えて、次の有事が何の前触れもなく発生する可能性もあるだけに、金価格が下振れするような局面では、分散投資やリスクヘッジのための需要が膨らむと考えられます。

金の主な注目点

資産面での主な特徴
実物資産であり、株式・債券と異なり、配当・金利がないが、信用リスクもない

選好され易い主な局面
① 戦争、災害など有事の際
② 金利低下局面
③ インフレ局面
④ 米ドルなど主要通貨が売られる局面

資産運用面での位置づけ
主要資産と異なる値動きをする傾向があり、他資産との組み合わせで分散効果が期待される

ニューヨーク金先物価格と主要指標の推移



※上記は過去のものであり、将来を約束するものではありません。

■ 当資料は、日興アセットマネジメントが情報提供を目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解および図表等は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■ 投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。